

Morphological, immunohistochemical, and genomic analyses of papillary renal neoplasm with reverse polarity

清澤, 大裕

<https://hdl.handle.net/2324/4784459>

出版情報 : Kyushu University, 2021, 博士 (医学), 課程博士
バージョン :
権利関係 : (c) 2021 Elsevier Inc. All rights reserved.

氏 名： 清澤 大裕

論文名： Morphological, immunohistochemical, and genomic analyses of papillary renal neoplasm with reverse polarity

(逆極性乳頭型腎腫瘍の形態的、免疫組織学的、遺伝学的解析)

区 分： 甲

論 文 内 容 の 要 旨

これまで乳頭型腎細胞癌(papillary renal cell carcinoma, PRCC)と診断された腫瘍の中に特徴的な形態を有し極めて良好な経過をたどるものが報告されており、近年そのような腫瘍に対し新たに逆極性乳頭型腎腫瘍(papillary renal neoplasm with reverse polarity, PRNRP)の概念が適応された。PRNRPはPRCCとは異なり高頻度にKRAS遺伝子変異を有する。今回我々は14例のPRNRPと10例のPRCC type 1 (PRCC1)及びPRCC type 2 (PRCC2)とを臨床的、形態学的、免疫組織学的及び分子生物学的側面から比較検討した。PRNRP及びPRCCの全症例に対し免疫組織化学染色を行い、次世代シーケンサー(NGS)を用いた全エクソーム解析を6例のPRNRP、3例のPRCC1及び4例のPRCC2に施行した。NGS未施行のPRNRP 8例に対しては、PCRを用いてKRAS遺伝子変異の解析を行った。結果、PRNRPの全症例がpT1N0M0であり、転移例や再発例、腫瘍死を来した症例は認めなかった。免疫組織学的にはPRNRPはCK7、EMA、PAX8、GATA3が全例陽性であり、CD10、CD15、AMACRの発現は陰性または弱い傾向にあった。NGS及びPCRの解析により、PRNRP14例中11例にKRAS ミスセンス変異が認められたが、PRCC1及びPRCC2では同遺伝子変異は認めなかった。また、PRNRPはPRCCより遺伝子変異量が優位に少なく、PRNRPでは7/17番染色体トリソミーを含めた特異的な染色体コピー数の増減も指摘できなかった。以上より、PRNRPはPRCCとは異なる腫瘍であることが示唆された。